

## 急性肝障害症例から学ぶ（2） EB ウイルスおよびサイトメガロウイルス抗体価の 臨床的解釈 — IgG 陽性・IgM 陰性例の意味

# 臨床 メモ

## 急性肝障害症例から学ぶ（2）

### EB ウイルスおよびサイトメガロウイルス抗体価の臨床的 解釈 — IgG 陽性・IgM 陰性例の意味

医療法人社団 全仁会 東都春日部病院 （春日部市医師会）病院長  
木村<sup>わたる</sup> 理

🔑 キーワード：IgG陽性・IgM陰性が持つ意味

#### 1. 序論

EBウイルス（Epstein-Barr virus:EBV）およびサイトメガロウイルス（Cytomegalovirus:CMV）は、ヒトヘルペスウイルス属に属する代表的なウイルスであり、日本においては成人の約70～90%がすでに感染済みとされる。両者は学童期から青年期にかけて初感染が成立し、ほとんどが不顕性感染である。臨床現場では、EBVやCMVの血清抗体検査の結果から「現在の感染か否か」を判断する場面がしばしばあるが、IgG抗体高値やEBNA陽性といったパターンが誤って“再感染”や“活動性あり”と解釈され、不必要な経過観察や再検査につながることもある。本稿では、IgG陽性・IgM陰性のパターンが示す臨床の意味を明らかにし、現場での解釈の誤りを防ぐことを目的とする。

#### 2. 症例・検査値例

以下は一般的な検査結果の一例である：

- ① EBV-VCA-IgG：80、IgM：10未満、EBV-EBNA：40
- ② CMV IgG：89.1、IgM：0.39

いずれもIgG陽性かつIgM陰性であり、既感染と判断される抗体パターンである。特にEBVにおいては、EBNA（Epstein-Barr nuclear antigen）の陽性が既感染の指標となることが知られている。

#### 3. 考察

EBVでは、感染初期にはVCA-IgMが陽性化し、その後IgGが出現する。EBNA抗体は感染後数か月経ってから陽性となり、以後持続的に陽性を示すため、EBNA陽性かつIgM陰性は“既感染”の明確な証拠となる。CMVにおいても同様に、IgG陽性・IgM陰性は感染の既往を意味し、現在の感染や活動性を示すものではない。

これらのウイルスは成人では再感染が非常に稀であり、特に免疫正常者においては混合感染や再活性化は例外的である。また、IgG抗体は長期的に高値を保つため、その数値の上下によって活動性を判断することはできない。

実臨床では、IgG高値を“感染の直後”や“再活性化”と誤解して経過観察が行われる例が散見される。しかしながら、これらは臨床的な意味を持たず、医療資源の不適切な使用につながる可能性がある。

#### 4. 結語

EBVおよびCMV抗体検査におけるIgG陽性・IgM陰性パターンは、明確に“既感染”を示すものであり、新規感染や再感染を意味するものではない。EBNA陽性は既感染の確証であり、IgGの経時的变化を追跡する必要はない。本稿を通じて、抗体検査結果の正確な理解と、それに基づく適切な臨床判断の一助となることを期待する。

#### 参考文献

慢性活動性 EBウイルス病とその類縁疾患の診療ガイドライン 2023, 監修日本小児感染症学会、診断と治療社  
造血細胞移植ガイドライン、ウイルス感染症の予防と治療、サイトメガロウイルス感染症、第5版、2022、一般社団法人日本造血・免疫細胞療法学会